平成7年2月1日発行（毎月1回1日発行）・第27巻・第3号・通巻381号・ヤング・ギター2月号

Magazine for Guitar Kids

YOUNG GUITAR

FEBRUARY 1995 2

THIN LIZZY
GARY MOORE
特別奏法企画
『SMOKE ON THE WATER』
~A TRIBUTE TO DEEP PURPLE~

好評連載企画 THE 名盤 Vol.11
『VAN HALEN』

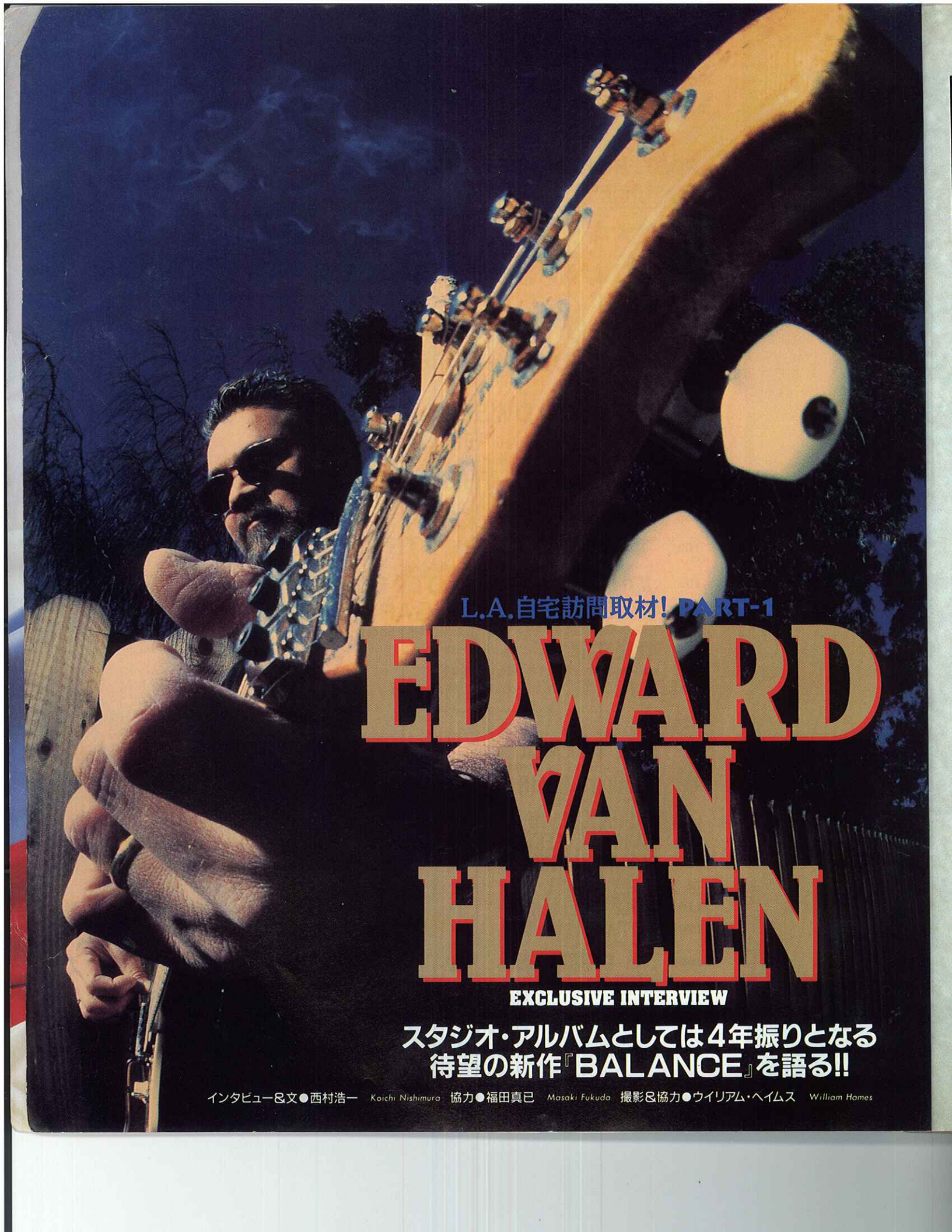
【豪華2本立】
直筆サイン入りギター・プレゼント!
JIMMY PAGE
PAUL STANLEY

THE SCORE
ONE DAY★GARY MOORE
SPEED KING●V. A. (guitar:Yngwie Malmsteen)
STAIRWAY TO HEAVEN●LED ZEPPELIN
POSTER●NUNO BETTENCOURT

YG EXCLUSIVE!! 2大ギタリストに【現地独占】インタビュー敢行!

EDWARD VAN HALEN
NUNO BETTENCOURT

新連載講座●ドゥイージル・ザッパの"やきねずみ"レッスン開講!


L.A.自宅訪問取材! PART-1
EDWARD VAN HALEN
EXCLUSIVE INTERVIEW
スタジオ・アルバムとしては4年振りとなる
待望の新作『BALANCE』を語る!!
インタビュー&文●西村浩一 Koichi Nishimura 協力●福田真已 Masaki Fukuda 撮影&協力●ウイリアム・ヘイムス William Hames

スタジオ・アルバムとしては前作『FOR UNLAWFUL CARNAL KNOWLEDGE』以来4年振りとなる待望の新作『BALANCE』を今月25日にリリースするヴァン・ヘイレン。果たしてエディーはいかなるプレイ、そしてサウンドを聴かせてくれているのだろうか？　また新技は…!?

それらを探るべくYG取材班はL.A.にある彼の自宅を訪ね、直撃取材を敢行！　その現場となった5150スタジオは、エディー邸宅とは距離にすると100m弱ほど離れた、自宅の敷地内にあるのだが、ナント、本人は買ったばかりと言う、まだナンバー・プレートも付いていないメルセデスを駆っての登場!!　車から降りてくるや「メルセデスだけど、エンジンと足回りはBMWなんだ。コイツは速いゼ!!」と新たな愛車へひとしきりの賛辞を述べたあと、フォト・セッション、そしてインタビューに応じてくれた。

では、まずアルバム・インタビューからお届けしよう。そして次号ではキッズ必読の奏法解説だ!

今回もほとんどの曲が一発録り! 本来バンドとはそうあるべきだよ

YG：まず、あなたのルックスが様変わりしたことに少なからず驚いているのですが、何か心境の変化でもあったのですか？　YGの9月号でもあなたの写真を紹介したところ、読者からもかなりの反響があったのですが…。

エドワード・ヴァン・ヘイレン(以下EV)：そうなの？　そんな大袈裟なことじゃないよ。ある晩に酔っ払った勢いで髪をバッサリやってしまって、次の日の朝に起きたらいつのまにやら口髭まで生えていたんだ(笑)。

YG：(笑)さて、スタジオ・アルバムとしては『FOR UNLAWFUL CARNAL KNOWLEDGE』以来4年振りになる新作なんですが、レコーディングを開始したのはいつ頃だったのですか？

EV：始めたのは6月だね。しかも今回のレコーディング期間は4カ月！

YG：ヴァン・ヘイレンのレコーディング期間としては、5枚目(『DIVER DOWN』)以来の異例のスピード仕上げになるのではないですか？

EV：そうだね。作業が凄くスムーズに進んだから早かったんだ。10月1日にはもうミキシングを始めていたからね。

YG：全部をココ("5150"スタジオ)で録ったのですか？

EV：ほとんどはね。でも、ヴォーカル・パートのいくつかはヴァンクーバーにあるブライアン・アダムスのスタジオで録ったんだ。

YG：ヴァンクーバーで？

EV：そう。今回のプロデュースを頼んだブルース・フェアバーンがそこに住んでいて、彼が家族との時間を持ちたがって離れたがらなかったから、僕らの方が数週間そちらに行くことにしたんだ。

YG：ミキシングは？

EV：ハリウッドにあるレコード・プラント・スタジオでやったよ。

YG：ブルース・フェアバーンと仕事をするのは今回が初めてですよね？

EV：そうだね。

YG：今回、彼にプロデュースを委ねた理由というのは？

EV：実は、ブルースにプロデュースを頼んだ件に関しては面白い話があって、僕は今回のアルバムを作るに当たっては、まず第一に"曲を最大限に生かしてくれる"プロデューサーを求めていたから、それなら彼が良いと思ったわけなんだよね。彼は今までにも数々の素晴らしい作品(エアロスミスの『GET A GRIP』等)を世に送り出しているからね。それに僕はブライアン・アダムスの曲が大好きなんだけど、ブライアンのアルバムにはブルースが関わっているとずっと思っていたんだよ。ブライアンは本当に良い曲を書くと思うし、今回は僕も誰かに曲のアイデア等の面で力を借りたかったんだよね。ところが、これはあとから知ったんだけど、そう思ったのは僕の勘違いで、ブルースは今までに一度もブライアンとは一緒に仕事をしてないんだよ(笑)。でも、きっかけは何にしろブルースとの仕事はとても上手くいった。彼には随分と尻を叩かれたからね(笑)。彼は時間を無駄にするのが本当に嫌いな性格だったこともあって、今回のレコーディングは思っていたよりもかなり早く終えることが出来たんだ。僕達にとってレコーディング期間が4カ月というのは驚異的なスピードだぜ！　もしブルースがいなかったら、今頃(註：このインタビューは11月下旬に行なわれた)はまだレコーディングの真最中だったと思うよ(笑)。

YG：レコーディングは普通どういった時間から始めるのですか？

EV：そうだなあ、大体いつもお昼くらいから始めるかな。で、夜の8時とか9時頃にみんなが帰った後で、自分のパートのダビングをやるといった感じなんだ。もし、それをやる必要があればの話だけどね。今回はほとんどの曲においてそういう作業をする必要はなかったけどね。

YG：そのようですね。今回のアルバムでも、やはりリズム・トラックはダビングなしの一発録りというのがほとんどといった感じですもんね？

EV：そうだね。ただライヴでやるのと同じように弾くだけさ。

YG：それは一発録りならではのライヴなノリというのを、意識的に狙ってるわけですよね？

EV：いや、そういう風に構えてやるのではなくて、単にレコーディングもライヴと同じようにやりたいだけのことなんだ。それってバンドにとっては当たり前のことじゃない？　だから他のバンドが、スタジオにおいてメンバー全員で一斉にレコーディングをしないのが、僕には理解出来ないね。まずドラムを録って、そのあとでベースとギターを入れて…みたいなね。それじゃあバンドとは言えないよ。僕達はみんな一緒にレコーディングするし、バンドとは本来そうあるべきなんだ。

YG：ヴァン・ヘイレンのアルバムにおいては、メンバーのみでのセルフ・プロデュースという方法は、まだ取られていないですよね？　そうしない理由というのは？

EV：今までの場合もそうだったんだけど、僕達はアルバムの制作に際しては、常に客観的な意見というものが欲しいんだ。だから、これまでもずっとメンバー以外の外部の人間と一緒に仕事をするようにしてきたわけなんだよね。ただ今回のアルバムは、僕らメンバー4人とブルースとの共同プロデュースみたいなもんなんだけどね。

YG：プロデューサーを選ぶ時の基準というのはどういったものなのですか？

EV：よく分からないなあ…。当たり前のことだけど、きっと彼らがやる仕事というのは、"何が良くて何が良くないか"という事を教えてくれる役割だと思うんだ。実際には、プロデューサーが何をやる人なのかを判断するのは難しいんだけどね。何故なら多くの場合、彼らのほとんどは何もしないからさ。別にプロデューサーが曲の書き方を教えてくれるわけではないし…彼らはただその辺に座ってて、"今のは素晴らしいテイクだ"とか"あまり良くないからもう1回やってみて"とかの指示を出すだけだからね。彼らの仕事には"ここからここまで"といった明確な基準があるわけではないから、言ってみりゃ紛らわしい職種なんだよ(笑)。ギタリストは、単にギタリストでしかないんだけど、そういう意味ではプロデューサーというのは、広範囲に亘って色々なことをする役目があると言えるかもしれないね。

YG：でも、例えばエンジニアとしてのキャリアを持つプロデューサーもいますよね？　そういう人の場合はサウンド・メイキングなどに手を貸してくれることもあるのではないですか？

EV：そのタイプのプロデューサーの場合だとそうなんだろうけど、でもブルースはエンジニア出身ではないんだ。前作の『FOR UNLAWFUL CARNAL KNOWLEDGE』で起用したアンディ・ジョーンズはそれに近かったけどね。ブルースの場合は、そういったエンジニア的な作業の進め方ではなくて、レコーディング時に要する総ての手順が頭の中に入っているというのかな。例えば、僕は注意力が散漫な方だから、一度に色々な作業をやろうとしがちなんだけど、そうすると彼が出てきて"今はこれに集中しろ！"なんてアドヴァイスを出すんだ。だからそういう意味では、彼の役割は学校の先生みたいなものだよ。ムチを振り回して僕らを働かせる…みたいなね(笑)。

YG：じゃあ、今回の彼の仕事ぶりにはかなり満足しているわけですね？

EV：もちろんさ！　内容的にもとても満足しているよ。さっきも言ったけど、僕達にとって4カ月でアルバムを制作するというのは驚異的なスピードなんだよ。それこそ『FOR UNLAWFUL CARNAL KNOWLEDGE』の時は物凄く時間が掛かったからね。

YG：ブルースとの作業の進め方についてですが、まず最初に彼とミーティングをして、今回のサウンドのおおまかなヴィジョンみたいなものについて話し合ったのでしょうか？　それとも既に出来ている曲を彼に聴かせて、そこから作業に取り掛かったのですか？

EV：最初に会った時に膨大な数の曲を彼に聴かせて、その中から彼が気に入ったものをピックアップしてもらったんだ。そうしてそれらの曲を更に練り上げてい

『BALANCE』VAN HALEN

(WEA JAPAN：WPCR-110 1/25リリース)

1. THE SEVENTH SEAL　2. [＊]CAN'T STOP LOVIN' YOU　3. DON'T TELL ME(WHAT LOVE CAN DO)　4. AMSTERDAM　5. BIG FAT MONEY　6. STRUNG OUT　7. NOT ENOUGH　8. AFTERSHOCK　9. DOIN' TIME　10. BALUCHITHERIUM　11. TAKE ME BACK(DEJA：VU)　12. FEELIN'　13. CROSSING OVER　(日本盤のみのボーナス・トラック)

[＊]第一弾シングル

Produced by Bruce Fairbairn　Engineer：Erwin Musper Mixed by Mike Fraser　Studio："5150"／Record Plant　Mastered by George Marino

って、それに加えて新しい曲も書いていったという感じだね。

ＹＧ：じゃあ、収録曲は総てニュー・アルバムのために書き下ろしたわけですね？

ＥＶ：うん、基本的にはね。ただ「NOT ENOUGH」というバラードのイントロに当たる「STRUNG OUT」という曲だけは、以前に思い付いたアイデアを引っ張り出して使ってみた。古いカセットをあさってて、たまたま見つけたものなんだけど、ブルースが気に入ったのでトライしてみることにしたんだ。あとの曲は全部、今回のアルバム用に新しく書いたモノだよ。

ＹＧ：曲作りはどのような感じで行なったのですか？今までのパターンだとあなたがリフを書いて…。

ＥＶ：以前と同じだよ。僕が曲を書いて、サミー（・ヘイガー）がそれに詞を付けるといった感じさ。

ＹＧ：以前はメンバー全員でスタジオの中でジャムりながら曲を仕上げていくと言ってましたが、今でもそんな感じでやってるのでしょうか？

ＥＶ：うん。曲作りに関しては何も変わってないよ。

ＹＧ：じゃあ曲作りにおいて、このアルバムで新しいアイデアや方法論を試したりしたとかというのは？

ＥＶ：特にそういうことはなかった。至っていつも通りのやり方さ。元々決まったアイデアを基に何かをやり始めるということは、今までにもやってきてない。それに面白いアイデアというのは、大抵の場合が何も考えないでプレイしてる時に浮かんでくるものなんだよね。

僕が書く曲は総て、歌を抜いても十分に音楽として成立するんだ

ＹＧ：では今回の収録曲についてお聞きしていきたいのですが、まず「THE SEVENTH SEAL」ではイントロのパートに僧侶が唱える“お経”のような声が入っていますが、あれには何か狙いがあるのですか？

ＥＶ：いやいや、ただ曲にフィットしたから入れてみただけさ(笑)。特に狙いがあるわけではないんだ。言わば、アレは雰囲気モノさ。

ＹＧ：「AMSTERDAM」という曲が収録されていますが、オランダはあなたの故郷でもありますよね？　その辺りからインスパイアされて出来た曲だとか？

ＥＶ：確かにそうなんだけど、でもそれとは何の関係もないよ。あの曲はハイになることについての歌で、“自分のやりたいように生きる”ということをテーマにして作った曲なんだ。“オランダのアムステルダムでは何だってOKさ！”ということを歌にした、ただのパーティー・ソングなんだよ。

ＹＧ：この曲のソロの頭の部分で聴けるのは、お得意のハミング バード・ピッキングによるプレイですよね？

ＥＶ：ああ、あれならいつもやってるよ。もうコレも何年間やってるんだろうね(笑)。

ＹＧ：凄く独特なフォームを用いてますが、どうしてああいうスタイルになったのですか？

ＥＶ：何となくだよね。こんな感じ（実演）で適当にやってて思い付いたんだ。

ＹＧ：誰か他のプレイヤーが、そうやってプレイするのを見て影響されたとか？

ＥＶ：いや、他には知らないな。それに他人のプレイを見ることなんてないから、みんなが何をやってるかなんて分からないよ(笑)。僕の場合は、そういった他からの影響というのではなくて、とにかく自分の頭の中に鳴ったサウンドを、どうにかこうにかしてギターで表現してみるというスタンスで常にプレイしているからね。だからああいうスタイルに至ったのも、そうした方法による１つの結果に過ぎないんだ。

ＹＧ：「BALUCHITHERIUM（バルチテリウム）」は、あなたのギターをフィーチュアしたインストゥルメンタル・ナンバーですよね。聞き慣れない言葉なのですが、このタイトルはどういう意味があるのですか？

ＥＶ：これはね、地球上に生息していた内の最も巨大な哺乳類で、恐竜の一種なんだよ。

ＹＧ：じゃあ、このインストはその“恐竜”をイメージして作ったのですか(笑)？

ＥＶ：まさか！(笑)　出来上がったらとてもビッグなサウンドになったから、結果的にそういうタイトルを付けたまでさ。

ＹＧ：ギター・インストと言うと、ソロ・プレイをフィーチュアしたものを予想しがちですよね？　あなたの曲の場合で言えば、例えば「ERUPTION」のような…。でもこの曲はそういうタイプではなくて、もちろん印象的なメロディーを持ちながらも、バッキングのリズム感やグルーヴ面をより重視したような凄くスケールの大きなナンバーに仕上がってて、いかにも現在のエディーらしい“ヒネリが効いてるな”といった感じを受けましたよ。

ＥＶ：そう？　あれには当初は歌が入っていたんだけど、なかなか上手くまとまらなかったのでインストにしちゃったんだ(笑)。

ＹＧ：そうだったのですか。ところであなたの場合、ヴォーカル入りの曲とギター・インスト・ナンバーとの振り分けみたいなところは、どういった基準で作り分けているのですか？

ＥＶ：ウ〜ン、基本的に僕が書く曲は全部、歌を抜いたとしても十分に音楽として成り立つものなんだよね。それは、そう心掛けていると言うよりも、もう今までの積み重ねから自然にそういう風になってるんだよ。だからこの曲も、たまたまヴォーカルが上手くフィットしなかったから歌なしにしたというだけなんだ。

ＹＧ：ギタリストによるインストゥルメンタル・ナンバーというと、まずどの辺りが思い浮かぶのでしょうか？　かつてアラン・ホールズワースをお気に入りだったように、そうしたジャンルで最近注目しているプレイヤーなんかはいますか？

ＥＶ：今は特にはいないね。ジェフ・ベックの『BLOW BY BLOW』は別格的に好きだけどね。ところで最近誰かインストだけのレコードを出したの？

ＹＧ：最近ではないのですが、例えばジョー・サトリアーニなんかは？

ＥＶ：聴いたことないな。アッ、確かコマーシャルで流れてたよね。それだったら聴いたことあるけど。でも普通はそういうアルバムは自分では買わないんだ。インストものに限らず、基本的に僕はレコードを買わないからね。とにかく自分のことで忙しくてね。

ＹＧ：全部インストというわけではないのですが、例えばスティーヴ・ヴァイとかも？

ＥＶ：うん。そういうのも全く聴かないから分からないよ。

ＹＧ：今回は曲によってチューニングを色々と変えていますよね？　例えば「DON'T TELL ME (WHAT LOVE CAN DO)」、「AMSTERDAM」、「BALUCHITHERIUM」はDチューニングのように聴こえるのですが？

ＥＶ：どれも６弦だけＤに落としてるだけだよ。

ＹＧ：他に今回の曲で変則チューニングを使っているのは？

ＥＶ：いや、実は今回新たにアーニーボール／ミュージックマンのギターにＤチューナーを付けてもらったんだ。こうやってブリッジに付いているツマミを引っ張ると、６弦の“Ｅ”が１音だけ下がって“Ｄ”になるんだ（P.10のレコーディング・ギター解説を参照）。

ＹＧ：それは今回の新兵器ですね。

ＥＶ：そう、新しいスペックなんだ。結構便利に使えるんだよ。

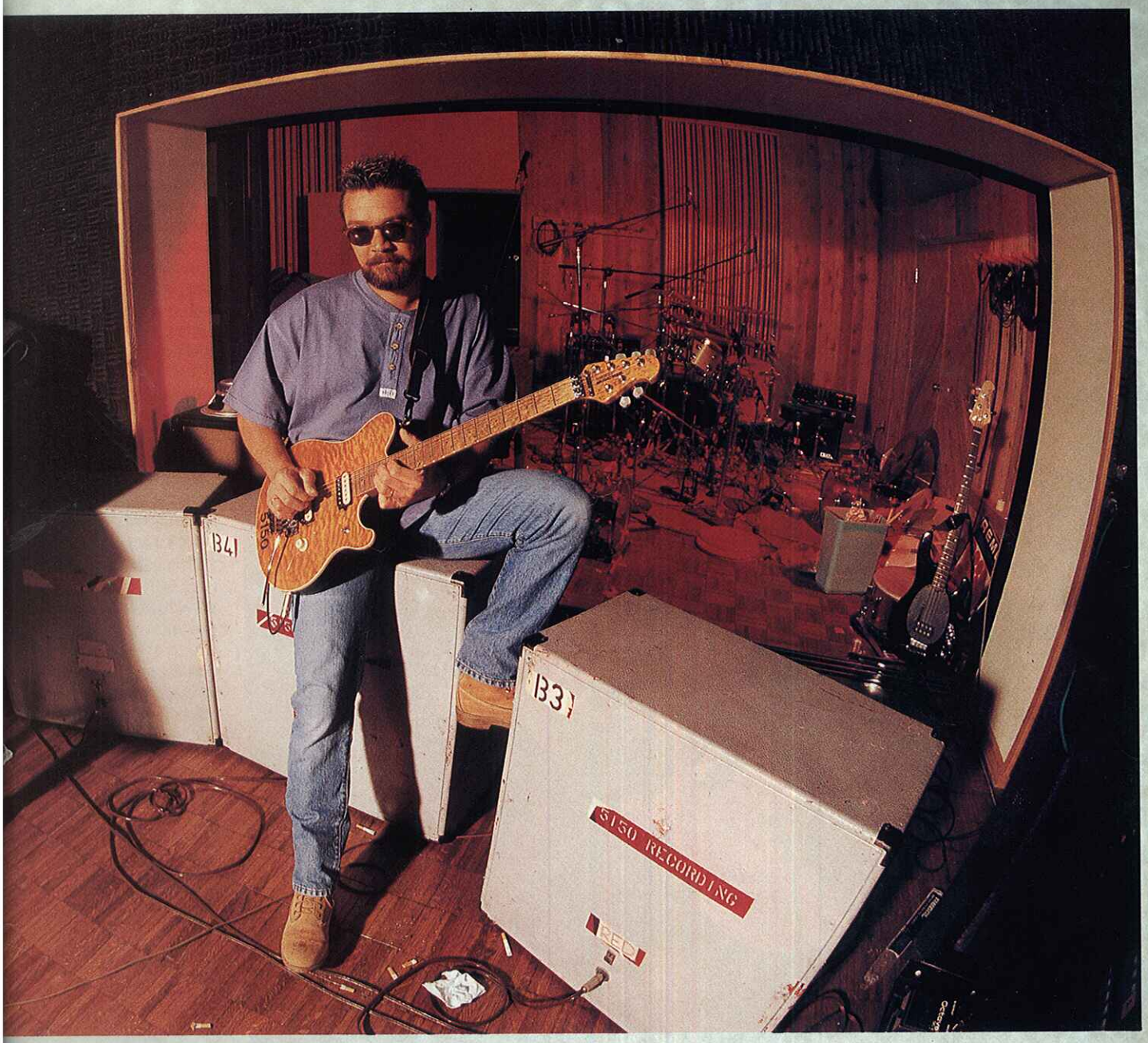
ＹＧ：なかなかのアイデアものですが、これはあなたが考えついたものなのですか？

ＥＶ：いや違うよ。誰かが考えたものだよ。

ＹＧ：それとさっき言った「DON'T TELL ME (WHAT LOVE CAN DO)」のイントロ部分では、ハーモニクスが混じったような物凄く低い音が出てますが、アレはひょっとしてベースでプレイしているとか？

ＥＶ：いや、ギターだよ。あれは６弦を“Ｄ”に落として、６弦のブリッジ・サドル部に右手の指を乗せてミュートしつつ弦を擦っているんだ。そうするとああいう風なサウンドが出せるというわけさ。

ＹＧ：そういう手があったわけですね。それと「BALUCHITHERIUM」のエンディング部分でもかなり低い



音が出てきますよね？

ＥＶ：あれは“Ａ”音に合わせてギター全体の弦を下げているんだ。６弦を“Ａ”にして、更にベース用の太い弦を使用しているから、出てくる音は通常よりも１オクターヴ低くなるというわけさ。ほとんど６弦ベースみたいなモンだけど、“Ｅ”じゃなくて“Ａ”に合わせているところがミソかな。

ＹＧ：そのベース弦のゲージは？

ＥＶ：忘れちゃったよ。でもただでさえ太いから、丸々１音下げても音に張りが残ててフニャフニャしたサウンドにはならないんだ。あの１曲だけにしか使ってないからあまり覚えてないけど、確かギターはミュージックマンのアルバート・リー・モデルを使ったよ。

ＹＧ：チューニングと言えば、以前はほとんどの曲を半音下げでプレイされてましたよね。

ＥＶ：もう随分前だね。デイヴ（・リー・ロス）の声域があまり広くなかったから、それに合わせなくてはいけなかったんだ。サミーが入ってからはスタンダード・チューニングでやってるよ。

ＹＧ：じゃあ、別に特別な効果を狙っていたわけではないと？　例えばギターの最も良いトーンを導き出すためにそうしていたのでは？とも思ってみたのですが？

ＥＶ：僕のギターは元々、“Ａ”＝442（通常は“Ａ”＝440）として使うようにデザインされているんだ。弦の振動が一番上手く伝わるようにね。たまに６弦を“Ｄ”音に下げて使う時もあるけど、それでも他の弦はスタンダードのままにしてるよ。昔はデイヴの声のこともあって、丸々１音下げていたんだ。そして彼の声のレンジが徐々に広がっていくにつれて１音下げから半音下げに、そして最後の方はスタンダードに近いチューニングでやれるようになってきたんだよ。最近はみんながサウンドをヘヴィに響かせるために、ワザと下げてるみたいだけどね。僕達は10年前に既にやっていたんだけど、でもそれは今言ったような必然性から来たことだったんだ。

「BIG FAT MONEY」では“335”のクリーン・トーンを使ってみた

ＹＧ：今回もソロは総てインプロヴァイズしたものなのですか？

ＥＶ：うん、確かそうだったと思う。

ＹＧ：そうやってスタジオで録ったあなたのソロに対しては誰がＯＫを出すのですか？　やっぱりプロデューサーであるブルースなのですか？

ＥＶ：いや、自分でやったよ。僕がブルースに“このプレイに満足したからこのテイクで良い”、というようなことを伝えるんだ。「DON'T TELL ME(WHAT LOVE

CAN DO)」のようにライヴ録りのソロは別だけど、リズム・トラックにあとから重ねるような場合は誰もいない時に自分ひとりでやってしまったからね。

ＹＧ：じゃあソロの場合、OKテイクの決定に関しては自らの主観に頼るというわけですね？

ＥＶ：自分で気に入ったらそれにするというだけさ。

ＹＧ：我々にとってはちょっと想像し難いところなのですが、あなたにとってあまりデキの良くないソロとはどういうものなのでしょうか？

ＥＶ：そんなことは分からないよ。ウ〜ン、そこはやっぱりフィーリングかな？　気持ち良く感じなかったらもう一度やり直すというだけだからね。だから他人が僕をプロデュースをするのって難しいと思うよ。だって周りの人達は僕がどんなモノを弾いても、君が今言ったのと同じ感じで、みんな口を揃えたかのように“グレイト！”としか言わないからね。例えそのソロが、僕の気に入らないテイクであったとしてもね。まぁ確かに彼らが正しいという時もあるかもしれない。実際にアルバムに入れたプレイよりも、そちらの方が良かったりしてね(笑)。でもやっぱり基本的には僕自身が気に入らなくては、アルバムには残せないな。

ＹＧ：じゃあいくら周りのみんなが“これが良い”と言っても、あなた自身が気に入らなければそのソロは“ボツ”ということになるわけですね？

ＥＶ：当たり前だよ。だって僕はそのアルバムと共に生きなくてはならないんだから、まず自分が気に入ったモノでなくっちゃ。周りのヤツらがどう思うかなんて関係ないよ(笑)。確かに僕の場合、ほとんどのソロはインプロヴィゼーションではあるんだけれど、それを構成することというのは、曲を作ることと同じレベルで捕らえられるべきものだと考えてるからね。

ＹＧ：ソロで言うと今回の収録曲では「BIG FAT MONEY」が一番のインパクトを持ってると感じたのですが…。これは軽快なロックンロールにソロだけがクリーン・トーンでジャズっぽく乗ってくるという、ちょっと異色なムードを持ってますよね？

ＥＶ：気に入ってもらえた？

ＹＧ：ええ、もちろん！　凄く面白いと思いましたよ。

ＥＶ：あれはね、ブルースのアイデアで、ギブソンの“335”を使ってクリーン・サウンドを出してるんだよ。

ＹＧ：本格的なジャズ・トーンですよね？

ＥＶ：でも適当にやっただけだよ(笑)。僕は色々なスタイルの音楽をプレイ出来るからね。

ＹＧ：こういうジャズっぽいプレイとかも、普段は時々弾いたりしているわけですか？

ＥＶ：適当にね。この部分も適当なインプロヴィゼーションだよ。簡単な12ノートの組み合わせを使って、ある特定のサウンドでプレイすれば、それらしく聴こえるんだ。いつもと同じような音使いでプレイしてても、トーンをそういったタイプのものに変えて弾けば、聴く人はそれをジャズだと感じるんだよね。つまり、ジャズとロックの唯一の違いは、ロックの方が音量がデカイということ、それだけなのさ(笑)。

ＹＧ：あの曲での、ソロの後のヴォーカル・パートに続く上昇フレーズは、実は“ワザあり”だったりして…？

ＥＶ：ああ、あれは両手タッピングで弾いたものだよ。

ＹＧ：やっぱり。他に両手タッピングでプレイした曲というのは？

ＥＶ：その部分以外は使ってないよ。

ＹＧ：その他で、何か今回新たにトライしたテクニック・プレイというようなものは？

ＥＶ：分からないなあ。CDを聴いてみてよ。僕はもうどんなプレイをしたのか忘れちゃったよ。

ＹＧ：では「AFTERSHOCK」のイントロでプレイしているのは？

ＥＶ：あれはタッピング・ハーモニクスだね。でもオ

クターヴ上をヒットしているだけの、ごくオーソドックスなパターンのものさ。

YG：「AMSTERDAM」のソロの頭の部分のタッピングに続くパートでの、クロマチックに上昇していくフレーズはどういうプレイなのですか？

EV：あそこはこうやって（実演）1、2弦をストレッチでつないで、それをピッキングしながらランダムにスライドさせてフレットを上昇下降しているだけさ。

YG：なるほど、見た目には簡単そうですが…ところでアルバム・タイトルの方はもう決まりましたか？

EV：「BALANCE」に決定したよ。

YG：それはどういう意味が込められているのでしょうか？

EV：人生についてだよ。人は"バランス"を取りながら人生を歩んでいるからね。良いことと悪いこと等、何ごとに付いても"バランス"を取るというのは大切なことだからね。数年前にアレックス（・ヴァン・ヘイレン）が思い付いて、僕がそれをずっと覚えていたのさ。アルバムの内容にも何となくフィットするしね。

YG：こう言うとアレですが、ヴァン・ヘイレンの場合って、いつもアルバム・タイトルに関してはあまりシリアスに受け止めていないような印象があるのですが？

EV：まあね(笑)。結局、タイトルというのは人々に"新しいアルバムが出た"ということを伝えるだけのものだからね。でも今回の「BALANCE」というタイトルは気に入ってるよ。

新作用にピエゾ・ピックアップ付きのエディー・モデルを作った

YG：では、今回のレコーディングで使用した機材関係についてお聞きしたいのですが、まずギターは？

EV：さっき言ったアーニーボール／ミュージックマンの"アルバート・リー・モデル"とギブソンの"335"以外は、自分のモデルをメイン・ギターとして使ったよ。

YG：さっきのDチューナーはどのエディー・モデルに付いてるのですか？

EV：イエローとグリーン・フィニッシュの2本だね。

YG：その2本がメイン？

EV：いや、メインはイエローの方かな。

YG：色々な仕様のエディー・モデルをお持ちですが、やはりそのイエロー・フィニッシュのものが一番気に入ってると？

EV：そうだね。でも基本的にはみんな同じ仕様なんだよ。その中でもイエローのヤツはネックの部分が一番フィットするだけでね。使い込んでる分、手に良く馴染んでて凄くスムーズな感触が得られるんだ。汗とかが染み込んでるからか、とにかく他のギターよりも弾きやすいんだ。ただ何年も弾かないと、こうはならないよ。だから僕のギターをリフレットしてもらう時は、ネックの部分をきれいに拭いてしまうヤツはブン殴る(笑)。僕は決してネックは拭かないし、汗とか手の脂で多少汚れている方が、さっき言ったようなスムーズな感じを出せるからね。だけどサウンドに関して言えば、基本的には、エディー・モデルの場合はどのギターも同じなんだ。

YG：今回はクリーン・トーンを割と多めに使ってますよね。

EV：そうだったっけ？　どの曲？

YG：「CAN'T STOP LOVING YOU」や、「FEELIN」…。

EV：ああ、そうだったね。「CAN'T STOP LOVING YOU」ではアーニーボール／ミュージックマンのギターにピエゾ・ピックアップを付けたモデルを使ったんだ。このピックアップはブリッジに組み込まれていて、ミュージックマンに特別に作ってもらったギターだよ。外見は従来のモデルとほとんど同じなんだけど、ピエゾ・ピックアップ用のノブが一個余計に付いてるんだ。

YG：そのギターも今回の新兵器というわけですね。で、アンプなのですが、前作では確かソルダーノとピーヴィーを使い分けていたと思いますが、今回は？

EV：ピーヴィーの"5150"と、あとは昔から使っているマーシャルを少しだね。

YG：えっ？　確か前回のインタビューでは、マーシャルはもう使うことはないだろうと話していたように記憶しているのですが…？

EV：そんなこと言ったっけ？

YG：(笑)"5150"の方は新たにカスタマイズした部分とかはあるのですか？

EV：いや。ストックのままだよ。

YG：サウンド面に関してなんですが、今回はいつもより以上にフェイザー等のモジュレーション系のエフェクターを多用しているような印象を受けたのですが、その辺りのエフェクトは何を使っているのですか？

EV：そうかな？　僕の印象ではそんなことないと思うけど…。

YG：前作と比べると、より強く出てるような気がするのですが？

EV：ほとんど前作のレコーディング時と同じ機材を使ってるんだけど。左右両チャンネルにディレイとハーモナイザーを多少掛けたくらいだしね。ひょっとして、今回はマーシャルを部分的に使ってるからかな。マーシャルはソルダーノよりも少しだけクリーンだからね。

YG：1st以来お気に入りのMXR"フェイズ90"とかは？

EV：それはライヴ用だよ。確かに1stの時は、特にソロ・パートにはフェイザーを強めに掛けていたけどね。でもそう言えば、今回も「THE SEVENTH SEAL」ではフランジャーを使ったな。でもホントに部分的にだよ。その部分のことを言ってるんじゃない？

YG：あそこはフランジャーというよりも"ジェット・マシーン"といった感じで、凄くCOOL！ですよね。

EV：だろう？　あれはMXRのフランジャーを使ったんだよ。

YG：ワウ・ペダルも数か所で使ってません？「BALUCHITHERIUM」の終りの方の部分では、それっぽい音がしているようなのですが…？

EV：最後のパートね。使ったかもしれない。でもこの曲では色々なことを試したから、細かい所は忘れちゃったんだ(笑)。ノイズっぽく仕上げてあるから何か動物園みたいでしょ？

YG：あの部分はトリッキーな技を収めたトラックが様々に交錯するといった感じで、聴き逃せないところですよね。ところで、最後のところでは犬の鳴き声みたいな音が聞こえるのですが？

EV：分かった!?　あまりにも動物園っぽく聴こえるので、終いにはうちの犬の鳴き声まで入れちゃったんだよ。犬の名前は"ダルマシアン"ていうんだけどね。

YG：「NOT ENOUGH」のソロ・パートは、他の曲でのソロ・パートのサウンドとはちょっと違って聴こえるのですが？

EV：ああ、あそこはレスリー・スピーカーを使ってるからね。

YG：やっぱり！　それと「TAKE ME BACK(DEJA：VU)」で使ってるアコースティック・ギターもとても"生"っぽくて綺麗なサウンドですよね？

EV："ダン・マッサー"というメーカーのギターだよ。2本持っているんだけど、両方共凄く気に入ってる。とても良いギターなんだよね。

YG：あの曲のソロはスライド・バーを用いたプレイですよね？

EV：曲にハマれば何でもやるよ。昔は速く弾こうと必死だったけど、今は何と言っても曲優先でギター・プレイを構成しているからね。

YG：「STRUNG OUT」はノイジーと言うか、少し奇妙なインスト・ナンバーですが、あれはギター・シンセサイザーを使ってるとか？

EV：シンセは使ってないよ。あれは10年前に録った音源なんだ。ピアノの中にあるストリング部分に、ナイフやフォーク、それにピンポン・ボール、バッテリーといったものを転がしてノイズを作ったものなんだ。元のテープにはああいったノイズが1時間分くらい入ってるんだけどね。実は、友人のピアノを使わせてもらって試したものなんだけど、レコーディング中にそのピアノを壊しちゃってね。それで新しいピアノを弁償するハメになったという、いわくつきの曲なんだ。とても高くついた曲だよ(笑)。

YG：(笑)元を取るためには、何としても発表しなければならなかったテイクなわけですよね。

EV：そうだね(笑)。

YG：それではアルバム発表後の活動予定について教えて戴けますか？

EV：まず1月はプロモーションの為にヨーロッパに行く。2月にはライヴのリハーサルを開始して、3月から全米ツアーをスタートだね。で、5月くらいにはヨーロッパを回るつもりなんだ。

YG：今回のツアーには日本公演も含まれてますよね？

EV：もちろん！　今のところの予定では、日本へはヨーロッパ・ツアーの後くらい…夏頃に行くことになるんじゃないかな。

YG：実現することを楽しみに待ってますからね。では、最後にYG読者に何かメッセージを戴けますでしょうか？

EV："Keep On Rockin'！"　それしかないよ。

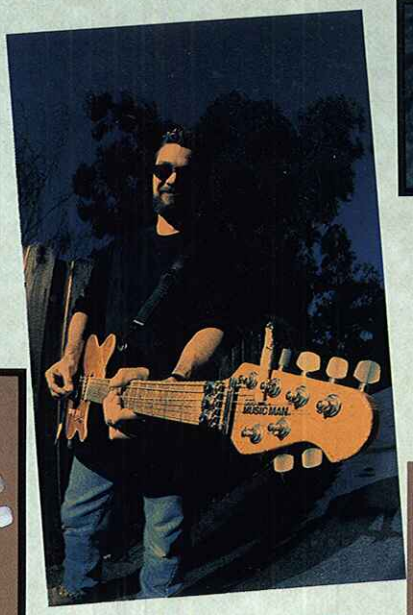
YG：どうもありがとうございました。

⬆(L. to R.)EDDIE, SAMMY HAGER(vo), ALEX VAN HALEN(dr), MICHAEL ANTHONY(b)

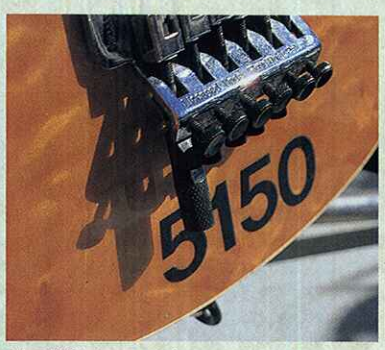
EDWARD VAN HALEN

ニュー・ディヴァイスを搭載！これがエディー・モデルの最新ヴァージョンだ!!

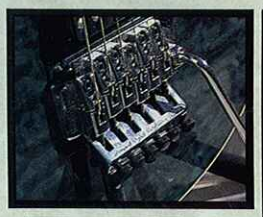
MAIN GUITAR

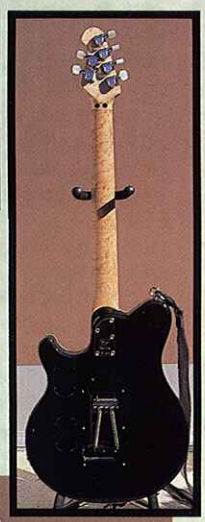


↓6弦のファイン・チューナーの裏側辺りに取り付けられているツマミに注目。押し込まれているこの位置が通常の状態。



↑上の状態から、このようにツマミを引っ張り出した状態にすると、6弦が1音下がる仕組みになっている。





今回のレコーディングでのメイン・ギターは、エディーが以前から愛用している、本人言うところのイエロー（正式には“トランス・ゴールド”）・フィニッシュのアーニーボール／ミュージックマン（Photo左）だ。スペックは以前と変わっておらず、ネックはバーズアイ・メイプル、ボディーはバスウッド・バック＆フィギュアド・メイプル・トップのブックマッチ仕様。ブリッジは以前と同じゴトー製のフロイド・ローズ・ライセンス・トレモロだが、これには今回から6弦用の“Dチューナー”が新たに搭載されている。このDチューナーは写真からも分かるように、ブリッジ部に取り付けられたツマミを引っ張り出すことで、6弦を1音だけ下げられるというスグレもの。新作に収録されている「DON'T TELL ME（WHAT LOVE CAN DO）」「BALUCHITHERIUM」等の曲は“6弦＝D”なので、それらの曲を聴けばその効果のほどが分かるだろう。愛用のメイン・ギターに装備していることからも推測出来るように、本人もかなり気に入ってる様子だったので、今後“6弦＝D”の曲が増えてくるかも…。また、フロント・ピックアップのボビンの上下が以前とは逆になっている。微妙なサウンドの変化を狙ったのだろうか…。

右のグリーン・フィニッシュのモデルは、ネックの汚れ具合などから見て、恐らく市販ラインのモデルの中から比較的最近に入手したものと思われる。こちらのブリッジ（ミュージックマン製）にもDチューナーが取り付けられていることから、今後はサブ・ギターとして活躍することになるのでは。

NEW ALBUM 1-25 ON SALE

VAN HALEN
BALANCE

Edward Van Halen(g), Sammy Hagar(vo), Michael Anthony(b), Alex Van Halen(ds)

Produced by Bruce Fairbairn

●WPCR-110●税込定価¥2,400●歌詞・対訳・解説付

収録曲：セヴンス・シール／キャント・ストップ・ラヴィン・ユー／ドント・テル・ミー／アムステルダム／ビッグ・ファット・マネー／ストラング・アウト／ノット・イナフ／アフターショック／ドゥーイン・タイム／バルチテリウム／テイク・ミー・バック(DEJA VU)／フィーリン／クロッシング・オーヴァー(日本のみのボーナス・トラック) 全13曲

No.1アメリカン・ハード・ロック・バンドのプライドが炸裂する

4年振りのオリジナル・ニュー・アルバム、満を持して堂々のリリー

ヴァン・ヘイレン／バランス

スペシャル4大特典!!
❶日本のみボーナス・トラック1曲追加収録 ❷最新カラー・ポスター ❸オリジナル・ステッカー(封入)
❹抽選でオリジナル・Tシャツが当たる応募ハガキ(封入)〈❷❸❹は初回出荷分のみ〉

★1st single/2-25 on sale「キャント・ストップ・ラヴィン・ユー」●WPCR-113●税込定価¥1,200●歌詞・対訳付

wea JAPAN

販売元 株式会社 ワーナーミュージック・ジャパン

YAMAHA

すべてのクラスで、世界最高水準をめざす。

RGX
全身ハイスペック構成の
コンテンポラリー・ハードロックギター。

YGX
ロック・スタイルに照準を合わせ
コーディネイトされた高品位モデル。

YGS
ギターサウンドの本質を追求した
ビンテージ・スペシャル。

NS　YNS　OVS

RGX-421M ¥45,000(税抜き)NEW
●パワー感ある鳴りを追求したリアルウッド・アルダーボディ。
●フロイドローズ・ライセンスのプロ仕様トレモロユニット TRS-Pro。
●豊かな低域が特徴のメイプル・フィンガーボード。
●FINISH:BP(ブラックパール)、NS(ナチュラルサテン)、AQ(アクア)

YGX-121D ¥33,000(税抜き)
●厳選されたアルダーorバスウッドのボディ・マテリアル。
●サスティーンの効いた深い歪みを創出する高感度PUをダイレクトマウント。
●高精度につくり込まれたビンテージ・トレモロユニット。
●FINISH:YNS(イエローナチュラルサテン)、BL(ブラック)、BLM(ブルーメタリック)、VIR(ビンテージレッド)

YGS-112T ¥36,000(税抜き)
●充分なシーズニングを施された鮮やかな木目のボディ材をセレクト。
●トラッドなボディラインが際立つ緻密なサンバースト・フィニッシュ。
●上質なナチュラル・サスティーンが得られるシンクロタイプ・トレモロ。
●味のあるハーフトーンを生むSSHレイアウトのピックアップ。
●FINISH:FB(フェイディッドバースト)、ATS(アンティックサンバースト)、OVS(オールドバイオリンサンバースト)

WORLD CLASS BASIC
基本性能に贅沢なモデル。それは、ヤマハにあります。

電池駆動の超小型マルチ・パフォーマー
"パワーボーイ"登場。

VA-5"Power Boy"
[5Wポータブル・コンボ]
¥7,800(税抜き)NEW
斬新なデザインのニューコンセプト・アンプVA-5"パワーボーイ"。電池駆動(単1乾電池6本使用・別売)と機動力の高いコンパクト・ボディで、アウトドア・ユースにも最適。5W出力、3トーン・コントロールなどの充実したスペックを持ち、サイズからは想像もできないパワーの高品質サウンドを再生。ベース、エレアコにも対応します。もちろんACアダプターでの使用も可能。●オプション:本皮キャリング・ストラップ¥1,800(税抜き)/ACアダプターPA-3　¥2,000(税抜き)

ギター/ベース
エレアコ対応

AR-1500T[15Wギター・コンボ]¥12,500(税抜き)NEW
ベストセラー・ギターコンボAR-1500のベージュ系レザー・バージョン。音響重視設計の堅牢なエンクロージャーに高能率スピーカーを搭載。クリーンからヘビィ・ディストーションまで、スタジオレベルのクオリティで出力します。

■価格は全てメーカー希望小売価格(税抜き価格)です。■カタログご希望の方は、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号、商品名を明記のうえ、〒430-91浜松市浜松郵便局私書箱3号ヤマハ株式会社LB-NB係まで。

ヤマハ株式会社

ヤング・ギター2月号　昭和47年10月2日　第3種郵便物認可　平成7年2月1日発行(毎月1回1日発行)　第27巻・第3号・通巻381号

発行・編集人　山本隆士

発行
発売　株式会社ワイ・ジー・ファクトリー
株式会社シンコー・ミュージック

雑誌08837-2　定価550円【本体価格534円】　Printed in Japan　© YG FACTORY, INC.　T1008837020559